

とろいもの味

—— 教育の根本義への一思索 ——

北郷小学校 山崎政三

私は二年間、その教え子と何一つ真に語り合うこともなく「卒業」という一時点に立たされてしまった。文字通りの失敗談であるかもしれない。

ゲーテは「人を最も感動せしむるものは、その心胸より出ずる言葉なり」といつた。教師と児童が共に苦楽をわかちあい、真実を語り合う、即ち魂と魂のふれあう教室こそ私の願った総てであつたが事実はあまりにもそれに遠かつた。たとえ忘れようとしても忘れられない子供への願い。やむにやまれぬ子供へのひたむきな願い。それは「祈り」であつたかもしれない。或は子供そのものが「神」としての存在であつたのかもしれない。今度こそしっかりと捉えることができたと思つても、その実、総ては無であつた。今日こそ私の言葉に心からの反応を示してくれたと思つても翌日は全く否定的でさえあつた。

かくして二年間はまたたく間に過ぎ去つてしまつたが、この「無」であり「否定的」であつたことが私のこの子への願いをより強くよりはげしく燃えさからせる結果となつた。時には一体あの子は「生きる力」があるのかと疑つてもみた。そして教育ということが可能なのかと迷つてもみたが、結局「生きて私の目の前にいるではないか」と自分で自分にいい聞かせ「この子は確にいるのだ」「この子は確に私のクラスにいるのだ」そして「この子も私と共に行じていく子なのだ」と私は心からその存在を信ずることができぬにいたつた。その間一年。かくして昭和三十一年三月二十八日、学校長は私と共に、この子の六年進学を決定してくれたのである。

昭和三十一年四月九日、第六学年受持としてのスタートの日である。教壇に立つ身にとって、この始業式の日こそ、はちきれぬばかりの希望に心はおどり、喜びは又無上であるはずなのに、私には「第六学年」という一語が何か大きな響をもつて胸に迫り、手ばなしで喜べないものがあつた。即ち「卒業」ということが既に明日の問題として意識されてしまつたのである。この朝、学校長の始業式における言葉の一つ一つは、卒業式言葉につながるものとさえ思われ、教室に入る前、思はず翌年三月の卒業式までの日数を数えずにはいられなかつたのである。

受持児童は62名、技術的といおうか、実際の指導にあつては、兎角、問題のあるところであるが反面、極めて無責任な考え方もかもしれないが感情的には子供の増えたことを喜ばずにはいられなかつた。

一語も真に語らずして卒業していった子、Iもこの中の一人である。「各科成績極めて劣る。身

長、クラス第三位なれど動作極めて緩慢。家庭貧困、父なし、兄二人、通学距離約一里……」

これが、わが受持児童Tのアウト、ラインである。

勿論、教師と児童が全的な交渉をもつ教育の過程を、具体的な事例として、あげつくすことは不可能なことであるが、紙面の許す限り、その一面だけでも捉えてみることにする。

一、 文通のこと

学校教育が集団的であることは、それ自身深い意味のあることであり、それは決して機械的というものを意味するものではないはずである。民主社会の教育が児童の尊重にはじまることは等しく教育史の証するところであるが、これこそ教育の第一歩であり、帰結でもあることを表面的な理解にとどまらず、われわれは体でもつて受け取れるまで真剣な考察をする必要がある。「他」を尊重するという事の根本には、やはり人間的な愛の存在が不可欠であることは、今更論をまつまい。

「児童を尊重せよ」「児童を愛せよ」とは総ての教師の心得であるかもしれないが、一体「愛」とは何なのか。……「理解」である。理解こそ愛の別名である。子供を知ること、これこそ愛なのだ。と私は意揚々として一步を進めた瞬間、一体知ることとは何かと今にしてみれば当然すぎる程の次の疑問につきあたった。あの悶々の苦しみ。愛、この不可解なるものと、自己に縋うちつゝTによる私の願いは単なる同情にすぎないのかと自己を責めるうち、理解とは「自己をもつて他を見ることである」と結論づけられる勇気を得るにいたった。自己にないものをもつて他を理解することはできない。総ての人を愛することは総ての人を理解し得ることであり総ての人の内容を自己に持っていることである。即ち愛以前の問題として、われわれは人を理解することができなくてはならないが、その人を理解する前に、まず自己を深め、自己を広めなくてはならないのではなからうか。「弟子を教え導くことは、師自ら学問することである」の精神に徹しなくてはならないのだ。

総てが一本勝負、明日では遅すぎる教育の場において、私はTの姿をあまりにも知らないまゝでいた。Tとの勝負即自己の学問自身であるという信念に立てなかつた過去が口惜しかつた。万物総て自己の深さに比例した存在であることに気づかなかつたのだ。

書を読むことは勿論、Tとの関係において自己を見つめ、自己の何たるかをほりさげてみなくてはならぬと心に決し「静思」ということと共に、知り得た総てを文章としてまとめることの価値を見出した。即ちTへの手紙である。

文通開始の第一の理由は、やむにやまれぬ自己の深奥からの衝動であつた。

「書かずにはいられない」

これが出発当初の心境であつた。

限られた日数に最大限の児童、自己の無力は知りつつも、焦せりに焦せらずにはいられない毎日であつた。午後四時の児童退校合図のベルに憤りさえ感じつつ迎えた五月十四日の修学旅行にはTは遂に参加しなかつた。そればかりか、平常の授業にさえ欠席しがちだつた。

この焦せりの中から「何とかして一分間でも多く共に接することの中にこそ解決の鍵があるのではないか」という一語が浮びあがつて来た。

「師と子が一分間でも多く接することができるよう」

これが文通なることを続けた第二の理由であつた。

或る時、Tは右眼の下に大きなあざをつくつて登校した。聞いてみると、兄ちゃんにぶんなぐられたという。

賽の河原の物語ではないが学校教育の集積がむしろ家庭から切り崩されることは、まゝあることではなからうか。

私はかつてベストロッチの著書の根本を流れるもののうち家庭教育というよりはむしろある家庭的雰囲気の必要性ということに強く感動したことがあるが、Tの場合も文字通りその家庭に大きな問題があつた。——この家庭環境についても細かく書くべきかもしれないが、母は日雇、長兄十九才、次兄十七才は共に工員。家の実権？はむしろ兄達にある。家庭は日中、常に留守。ということにとどめる——。

既に手遅れのことであるかもしれないが、この母や兄達こそTへの手紙を通じて、たとえ間接的にしる教育する必要があつた。

「親や兄達の啓蒙、そして緊密な連絡」

これが文通をより強く推し進めた第三の理由であつた。

X X X X X X X X

こうして私は文通を開始したが、何かこの試みから学校教育に関する問題点解決の手がかりでも発見できるのではないかと期待してTだけにとどまらず諸般の事情を考慮して、A、Bの二児童を実験児として選定した。結果として文通指導が予期した通りの発展を示したのは、このA、B二児童の場合であつたが、この「文通指導に見るA、B児の成長」は後の機会にゆずることにして、今はその概略だけ極めて簡単に付記するにとどめる。

A、Bとの文通はTの場合とは意図するところが若干異つていたが根本においては前記三点と同様であつた。手紙の内容は子供の学校生活に限らず、家庭生活までも含めた生活万般におよんだが、文通が真に意義あるものとして発展する為には、第一に学級の雰囲気と和気藹々であることが必要であり、次は教師も權威の座のみに立つことなく、子供もまた自己の殻の中のみとじこもることなく共に真実を語り合えるところまで成長していることが不可欠である。

こうして第一通は私の方から発したが、その返事は次の様に極めて形式的なものであり子供自身

の手になるものとは思われなかつた。

本当に夏がきたような気がしますね。

返事がおくれてどうもすみませんでした。先生の手紙はとつてもうれしかったです。こんどからもつと勉強しようと思います。先生に安心してもらえるようにうんとやります。先生体に気をつけて下さい。 さようなら

A

形式的であつたのはむしろ私の方であつたかもしれない。これこそ子供の問題であるとして細々と書き送つてみても、全くのピンとはずれであつたり、子供が何を考え、何を望んでいるかなどということも、なかなか掴めるものではなかつた。子供の心に芽生えて来た一種の仲間意識も、むしろ飛躍しがちな私の手紙で、つみとられてしまつたことさえあつたのではないかと思つている。

無謀なことではあつたかもしれないが、子供の動きを見つめ、友達との会話の中の一語にさえ神経をくばりつゝ、なおも手紙を書き続けた。いつか「歯車のかみ合わさる日」の来ることを信じてつ。

歯車のかみ合い、両者共通の場に立つたことを真に意識してくると子供は、教師の目のとどかないところで経験する——主として家庭生活であるが——ことがらも、もう書かずにはいられない衝動にかられ頻りに書き送つて来るようになった。それまでは教師が発信して子供が返信するという受動的なものであつたが、こうなつてくると、むしろ受身は教師の方であつた。毎夜のごとく書かずにはいられないその時の喜びは、今思ひおこしても胸のひきしまるほどである。返事の一語一語も決して不用意なことは書けなかつた。単なる教訓的なことでは済まずわけにはいなくなつて来たのだ。

子供は完全に自分の問題を正視して来たのである。今迄、軽々しく教訓めいたことを話して、万事足れりとしていた事の愚さが痛切に反省されて来た。子供は真剣なのだ。

先生、おれはまちがっていたんですか。

夕飯の時「はし」をおれがとつてしまつたら弟がおこつてしまつた。夕飯をたべてから又弟からマリをとつちやつて、かべにぶつけていたら、くぎにぶつかつてパンクしてしまつた。そこへ父ちゃんが出来たのであわてゝ逃げたら、からかみをやぶいてしまつた。追つて来ると思つて外へとび出した。しばらくして帰つて来てからえんがわでお月様を見ていたら「お月様の見物か」といわれたので「ちがう」といつてやつた。木戸の方へ行つてあげようとしたがなかなかあかない。台の上で休んでいるうち、だんだん寒くなつて来た。二枚きりか着ていたなかつた。そこへ母ちゃんが来た。おれはすぐ家の中へ入つてふとんをかぶつて母ちゃんとおばあちゃん

の話聞いていた。……(中略)あんまり悪いきもちでかまつたのではないんだけど、先生おれは、やつぱりわがまゝなんです。本当にわがまゝなんです。 B

こうなつてくると親も書かずにはいられなくなつてくる。そして遂に親からも私に手紙を送つてくれるようになった。「親がのり出してくれること」これこそ私の願つたことだつたが、今、その現実を直視してみると、私はそれがあまりにも単純、安易な見方であつたと痛感せずにはいられなかつた。即ち親の経験のない私が、親に「子の導き方」を書くことが果してできるのかというわが内からの批判であつた。

「家庭がもつと積極的に子供の教育にのり出してくれたら……」とは日頃口にした言葉であるが、これ程の暴言が又とあつたろうか。親に対してそれを望むということは、その親をも教育することができるという自信の上のみ許されることではなかつたか。自分が親として子の教育に携わつたこともなく、その難しさに逢着した経験さえないのに、親の教育が何故できようか。然しながら親はのり出して来ているのだ。「どうしたらよいのだ」と私にその解決策を求めてきているのだ。私は単なる教育理論をくどくどしく書いて責めを果そうという気にはなれなかつた。良心がそれを許さなかつた。

この行きつまりを打開してくれたのはわが職員室の戸辺談話であつた。この戸辺談話は校長、教頭をはじめ、いつの間にかそこへ集つて来た職員で、時々夜の更るのも忘れ、教育論に花を咲かせるのであるが、学校長はその時、極めて単純に聞える言葉ではあつたが「自己の全力をもつてぶつかることそれ自身に価値がある」ということをいつていた。その時の私にとって、これ程、価値あるものはなかつた。かくして私は再びペンをもちつづけた。

次は親からの手紙の一例である。

おはようございます。毎々の手紙、失礼の程お許し下さい。Aのことにつきましては本当にお世話様になります。

今朝、七時三〇分、まだ起きません。思いあまつてペンをとりました。起こそうとすれば大声でとなる。毎晩の様に寝る時は大騒ぎ。何から問題を見つけてはたてつく。弟にあたる、泣かせる。手袋は少し切れてはいるが、クリスマスまで待ちなさいと言えば、すねる、騒ぐ。わが子とはいへ、そのわがまゝさには実に実にあきれました。……(中略)何かひねくれている様なところさえ見受けられ、親として恥しい次第です。先生、一体如何様に指導していつたらよろしいのでしょうか。乱筆にて失礼します。 母より

こうして親との文通も盛んになつていつたが私ほどこまでも根本的にはヘルバルトのいう「良母は百人の教師にまさる」の一線をもつて貫きとらした。自己の何たるかさえつかみ得ず、親の経験さえ

ない者が、父は、そして母はいかにあるべきかと書かねばならぬ矛盾に苦しみつゝも、全精魂を傾けて書き綴つた手紙の数々は、たとえつたないものであつたにせよ結局、私自身を打ちすえる鞭も同然であつた。時には、手紙だけでは不十分と、親と子と教師の三者が共に語り合つたこともあつた。家の面目、親の權威をぬぎすてて、子供をとりまく問題を淡々として提起し、共に考え合つたこと。いきつくところは「子供、この未知なるもの」から「子供、その成長の遅しさ」そして「子供、この偉大なるもの」との驚きの境地であつた。

カントは星輝く空と、わが内なる道徳律の二者こそ感嘆と崇敬とをもつて、心を充すものとしたというが、驚きに発するこの思索の深さ、何か心に迫るものがあつた。

今、傍に積まれている百四十通余の手紙はわが教え子の魂の記録として、永遠に私の「自己深化」のみちしるべとなつてくれるだろう。

X X X X X X X X X X X X X X X X

さて、こゝでTとの本論に入ることにする。文通は完成に失敗であつた。読んでくれたらしいが返事は一通も来なかつた。母や兄達が読んでくれるかと期待しつゝ、なおも書き送つたが結果はやはり同じだつた。この原因をつきつめていつたところ、結局学校という立場から私が考える程、家庭生活は単純でなかつた。経済的に困つているとか、家庭が常に留守であるとかいうことは、前から聞いてはいたが、それは言葉としてのみ聞き入れただけで、実際その様な環境下で生活することが、どの様なことなのか、私には実感をもつてうけとめることができていなかったのだ。氷が笨度で凍るとはわかつていても、その冷さが、どれ程なのか、その中に身を投じてみなければわからないように。

問題は文通以前のものであつた。Tを知る為にはTの家庭を知らなければならない。私は可能な限りの時間をさいて、Tの家庭生活に近づき、又、Tの家庭へ帰つてからの遊び仲間をたずねようと決した。

時、昭和三十一年五月二十一日。既に受持つてから一年一ヶ月の時が流れていた。Tは学校にあつては依然として特殊異様なアクセントを持つ「ハイ」という返事のみ。卒業までの残された出席日数は、わずかに二百二十日間あまり。

三 家庭及びTの仲間への接近

朝、出勤前には主としてTの家庭を訪ね、夕方はTの遊び仲間をたずねたり老杉しげる行道の谷川に遊ぶことを楽しみとした。勿論、私の出むくことにT及びその家族が心理的な拘束感を感じない様、細心の注意をはらいつゝ続けていつた。兄は午前七時には出勤し、Tが家を出るのは七時二十分頃を常とした。私は家庭にもうすこしの理解があつたらと長兄の帰宅時間を待ちうけて、母も交えて何度も話合つた。皆、真剣になつて話してはくれた。然しながら、三日もたたぬうち総ては

崩れ去る始末。「あまりのことに腹がたつたから」とのことである。原因は深いところにあつた。

こうしてTの家庭生活は徐々に明かにされてきたが明かになればなる程、難点は増えるばかりだつた。「愛の不足」「家庭の暗さ」「親の無理解」等々のことが子供の成長に悪影響を及ぼすとは、誰しも一口にいうことではあるが、その暗くならざるをえない、又は無理解にならざるをえない人間社会の根本問題が次々に私の前に提起されて来たのである。問題は既に一人の教師の力をもつてしては解くことのできない深さをもつていた。……方途如何にと迷いながらも、Tが徐々に私に接近してくるようになったことが、たまらなく嬉しかつた。然し、間もなく母から次の様な手紙がとどけられてきた。(全文、原文のまま)

先生に申しはげありません。子供が毎日休むようになってこまりました。私しが毎日学校に行きなさいと云つて居ます。お友だちにもお気のどくです。どうしても学校に行つてくれなければ私しはじつにつらいです。先生、ほんとにこまつたはね。私くしは色々と考えましたが本城に私しの御しんせきが有ますので、その内でそうだんして其内から学校に出していただきたいと考て居ます。先生も御心ばいしているでしやうと思つています。ほんとうに申しはげ有ません。

母より

母親が素朴ながらも願うことは、この家庭においては実行困難であつた。母親の発言はこの家庭においては何等力がなかつたのである。

家庭を啓蒙することの必要性を痛感するが故に、ふみ込んだ一歩であつたが、そこには教師の力の限界をこえる複雑な問題が山積していたのである。然し限界外として放置することはできない。Tの「生きる力」の存在を信するにいたつた今、むしろ不可能なるが故に進まずにはいられなかつた。しからは方途如何。不可解。こゝに苦しみがあつた。誠にスピノーザのいう通り「難きが故に尊し」であつたのかもしれない。これも又、自己をうつ鞭であつた。(※Tは転出しなかつた)

三 総力を結集して

勿論、私はTの登校を願つたわけだが、それよりも家庭がTの特殊性を、はつきりと認識してくれるところに第一のねらいがあつた。学校長や教頭、或は民生委員に事あることに意見を求め、指導を仰ぎつゝ歩を進めて行つたのであるが、この種、児童にあつては、専門的な立場からの資料も必要であつたので、脳及び全身にわたる健康診断を専門医から受けてみた。

かくするうちに昭和三十一年は、既に暮れようとしていたのである。

昭和三十三年元日の朝、私は行道山頂で御来迎を仰ごうと2、3の父兄と共に午前五時登山した。

私が登ったことをどこで聞いたのか、帰途Tの家のそばまで来た時、私は母親によびとめられた。突然、菓でつまんだ大きな包を差し出して食べて下さいという。それはTが「もう卒業だから先生に何かやりたい」といつて冬休みになつてから毎日、山へ行つて掘りつとけたという「山いも」であつた。今日、新年祝賀式で登校する時、Tが持つて行くといつていたのだそうだが、こゝでお渡しすると母親は言葉すくなく説明してくれた。……何もかも忘れて山いも掘りにうちこむTの姿が一瞬、心に浮ぶ。

行道の峯々はまだ初日に輝いていた。

一月十三日(日)受持児童と共に行道山に登つた。Tも同行するというので嬉しかつた。途中、Tの家へ立寄つて、過日の「山いも」の件、厚く礼を述べ、学用品でも買つてくれるようにと、わずかばかりの金をおいていつた。長兄が今日は休みとか、一人で留守居をしていた。一同、行道山で一日を楽しくすごし夕方下山したが、帰途、工場帰りの母親にあつた。挨拶だけで別れて来たところ、その二日後、母親から次の様な手紙が届けられてきた。(全文、原文のまま。)

作日はひつれいしました。先生にあいました時は子共にあいながつたのです。先生にひつれいしました。夜になつて子共が先生にお金をいただきましたといひました。そのお金を電気料にしてくれとTがいつていました。電気料にしないと電気を切られてしまうとTがいつていました。電気を切られるとらじおきこえないしまんがの本もよめないから電気料にして下さいとTがいつていました。其のお金は電気やにやるからといつたらTがよろこんでいました。

母より

Tは学芸会にも喜んで参加した。Tは体でもつて作文を書いてくれたのだ。そして予期していたことではあつたが昭和三十二年三月二十三日、卒業式は到来した。この日こそ、当然すぎる程、当然の事が、当然と考えられぬ程、私の頭は混乱したがTは前から3列目の向つて左から4番目に着席していたことだけを附記するにとどめる。

言葉の妥当性は欠くと思ふが果して勝敗いずれに。Tは卒業していつた。私の手に残るものはただ1つ「敗」の1字のみである。然しこの一字にこそ何か意義あるものが存在する様な気がしてならないのである。即ちこの様な児童を「他」と見た時は、種々問題はあろうが、この大自然に生きる人間、即ち「自」としての認識に立ち得た時は、そこには何か尊敬なるものが感ぜられて来るのである。そして極めて平凡なことかもしれないが、教育が単なる一般論では済まされぬことを、この目で見、この手で触れ得たことを無上の喜びとしているのである。

ペスタロッチはその著「白鳥の歌」において、基礎陶冶の理念は人間の心情、人間の精神、人間の技術の能力と素質の合自然的な発達と完成の理念であるとしたが、誠に尊い境地である。そして彼の言う「教授学校はあるが人間学校がない」の一言にはぐつと胸に迫るものがある様だ。

然らば、「教育」とは何か。曰、依然として不可解たり。教育の根本義への思索、私はその歩をとどめたくはない。不可解なるが故に進めざるをえないのである。

× × × × × × × × × × × × × × ×

T去ってから一年。去る二月九日、私は学校長及び2、3の人達と共に行道山へ登った。帰途Tの家へ寄ったところ、母親がいた。Tは今、町へ便に出て留守とのこと、母親は恐縮しながら話してくれた。

私は嬉しかった。Tが学校へ行っているとかいないとかいうことではなく「Tが元気である」ということだけで心は明かかった。静かに思い浮べる時、私に提起されて来た数々の問題は生々しい現実社会の問題であつた。それは「^{ナマ}生」なるが故に複雑だつたのかもしれないが私にしてみれば「^{ナマ}生」なるが故にやり甲斐もあつた。

Tが山いも掘りをした山は、もう夕日に輝いていた。私は生で食べた「山いも」の味を思いおこしつゝ帰途についたのである。

※ ①この記録は児童及び親からの手紙と指導日記を資料としてまとめたものであるが、用語等吟味不十分なところもあることをお詫びしたい。

②T及び文通指導の問題を「教育の根本義への思索」という面から眺めたものである為、教育方法論的考察や資料の提出はされた。